



発行日 *** 2010年9月1日 e-mail: akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

皆様からの投稿をお待ちしております

<http://www.justmystage.com/home/akutagawa/>

一部50円です

深読み

私の気持ちは移ろいやすい。特に人が集まる場では、考えていた事と反する行動をしてしまうことがある。

ここ数年参加していなかった山仲間のビア・パーティーであった。幹事役の先輩から、「高槻でやるから来い。日時も君の都合に合わせてから」と言われ断れなかった。いつも通りOBが十人余り集まるのだらうと思っていたら、現役の学生が参加するという。私は、金が要るから現役とは会いたくなかったのであるが、欠席するのも大人気ないから出席した。現役は今夏、ヒマラヤ遠征を計画しているから援助金を集める狙いで由べえが呼んだのである。「由べえのバカ、現役なんか呼ばなくてもいいのに」と思ったが、後輩ながら副会長で頑張っている彼には言えない。

先輩たちの話で盛り上がり、ビールで酔いがまわってきたころ、由べえは立ち上がって「私は五十八歳で、この中で一番若い。一昨年、幹事長の電話で副会長の役を引き受けさせられました」と簡単ないきさつを話した後、「私がこれまで一番世話になったのは“しもやん”だ」と、珍しく私を褒めるスピーチをした。嫌々ながら参加した集まりではあったが、調子者の私は、由べえの意外な言葉に舞いあがり、有頂天になってしまった。

私は、もちあげられた事で気分が高揚してしまい、トイレに立った帰り、酒の酔いも手伝って皆が見ている中、現役に「遠征資金に寄付するわ」と万札を差し出した。すると周りの先輩から「“しもやん”が出すんか!」と呆れた声が漏れる。「それじゃ、しゃあない、わしも出すわ」と渋っていた人も出した。

家内に、この話をしたら「由べえさんの読み勝ちやね」という。「あんたわからんの、由べえさんは、如何に寄付金を多く集められるか考えたのよ。一番金のないあんたが一万払えば、他の先輩は一万以上くれると読んだのよ」「えっ、そんな機転がきくやろか。由べえを見直さないかん」それにしても、我が性格の単純さと酒を飲むと一気に気前よくなる自分に呆れてしまう。

知人の〇さんが来て、

「このままでは、我ら男は捨てられる。新しき村を創って居場所を作らなアカン。今話題になってる百歳以上の不明老人も大半はきつと男やで」

彼は七十五歳で社長なのだが、一念発起して数年前から家族と別れ、老人ホームに居住して店へ通っている。

「息子達の生活を見ていて、わしを世話してくれと言えないし、息子達にもその気がない。わしは、彼らから自立した老後を何とかしたい。」

「そうですね。爺捨て山の世界です。男達は、金を稼ぐ時には居場所があるが、稼ぐ事が出来ないようになったら、ロボットのよう捨てられるが、そんな事はないと思いたがっている。百歳以上の不明老人の問題なんか見てもはっきり分かる。行政も家族もみんな知らん振りをするから、頼りしたらアカンですわ」

「それでな、こないだスイスを旅行したとき見て思いついたんだけど、ワイン畑作って自立する。どう思う?」

「濁酒とワイン、どちらも作りましょう。」

「金も要るから、会員を募らな。」

彼は、葡萄の木を畑に植えて栽培方法を研究する事になった。

梵店主

見渡す限り広い谷間には、人が住んでいるような痕跡は何一つなかった。人工的なゴミなどは全く目につかなかった。我々が初めて訪れる人であるかのような錯覚を覚えた。自然のままの山河が我々を迎えてくれたのである。

氷河から流れだした川は夕方になると涸川になってしまい水は消えて、気温が急激に下がる。川の水を汲んだポリタンクをテントの入口に運び夕食の仕度をはじめ。トルコ産の米を炊き、カレーが今夜の献立である。明日からキャラバンを始める計画だ。

カレーを食べていると物音がするのデントの外へ出ると数人の人がいる。リエゾンにお願いして、明日からのキャラバンのポーターを十数人集めてもらうように話してもらった。現地の住人はどこに住んでいるのか分からなかったが、明日の朝7時に来てくれるようにお願いした。昼間は暑かったが日が沈むと冷えてくる。

翌朝、早く起きて荷物を区分けし20キロの重さに分けて平等になるような荷を作った。その仕事が終わらぬうちにポーターたちが集まってきた。子どもたち

はついてきて見物している。彼らは荷の重さを点検し、担ぎやすいように工夫する。

それぞれに荷札をつけ紛失しないように気をつける。我々隊員も荷物を担ぐ。9時前にキャラバンを開始した。20人ほどの隊列である。一時間歩いて休憩する。我々が支給した靴を履いている者や裸足のままでいる者などいろいろである。

一人の若者などは頭に大きな腫瘍ができていて痛そうだったので軟膏を塗ったが、薬は飲んだことがないからと拒んだのでやらなかった。その他医療行為が必要と思える人が幾人かいたが、我々の隊には医者がいなかったの

で治療が出来ず申し訳ない思いをした。一度も医者にかかったことがない人ばかりだったと思える。2時間ばかり歩いて民家が見えてきた。土と石と小枝で作った家は低くて小さいものであった。家の庭には石垣で囲んだ羊やヤギの家畜を飼っていた。家の中を見ると平たい石があつて、ロティを焼くためにだと思つた。きわめて原始的で簡素な住まいである。

ポーターたちは布に巻いたロティを一枚持つて来ていた。ロティは、とうもろこしの粉を水で捏ねて丸い厚めのパン状にし、熱した石で焼いたクレーパーみたいなものである。味は塩味で淡

白である。飲み物はチャイという、紅茶と羊のミルク、砂糖をたっぷり入れて煮込んだものである。

よっちゃんは彼らの住居をみて寒い冬を過ごすことは大変だろうと思つた。食べ物も少なく暖房をとる木もない。彼らの燃料は、家畜の糞を乾かして燃やすわずかな火だけである。

老婆と思える女性も年令は若い。厳しい風土が老化を進めるのだ。何もかもが、人が生きていくには過酷な環境である。しかし、彼らの表情は明るく屈託がない。とくに若い子の目がきれいで澄み切った印象を強く感じた。

3時過ぎにテントが張れるところに着いたので行動を打ち切る。ポーター達に日当を払うが、彼らは割り増しを要求してくる。よっちゃんたちは、現物給付した靴や雨具などで充分彼らの要求をのんでいるが喧嘩は出来ないで少し多めに払つた。明日も来てくれるように言いながら彼らを見送つた。テントを張り夕食を作つて食べる。

リエゾンは専用のテントで寝起きする。彼は敬虔なイスラム教徒である。ラマダンが始まると、日の出から日没まで飲食は一切しない。日本人にはそういう断食が信じれない行

事なのだが、イスラム教徒にとつては大事な宗教的義務なのだ。一ヶ月間は皆が断食をするのである。

よっちゃんがビックリした事がある。貧乏隊でも若干のゴミは出るが、どんなゴミもポーターたちは拾つて持つて帰つた。空になった缶や紐など全てのものが彼らにとつては貴重な品物であつたのだ。

ポーターと話して驚いたのは、その記憶力である。変化のない生活のためか随分むかし

の出来事を昨日のようにおぼえていた。よっちゃんが「ここへ誰か外国から来た事はないか？」と聞けば、「十年前に来た」と昨日のように憶えている。

電気もガスもない原始的な生活ではあるが、そこに生きている人は、日本の山奥に暮らす人と変わらないように、よっちゃんには思われた。道や家の周りなどもきれいに掃除されゴミと思えるようなものは見当たらない。学校もない。集落らしきものもない。狭い石ころだらけの道ががれきの山の斜面にあつて、人が荷を担いで歩くことすら大変であつた。そんな道のすぐ側に、小さな家がぼつぼつと点在していて、その数はわずかであつた。草木がほとんど無い風景を見て、よっちゃん

は、日本が如何に恵まれた自然であるか思い知つた。



この投稿を始めさせてもらったとき、私は義兄が死ぬのではないかと思っていた。肺ガンで手術はできない状態だという診断だったからだ。だから、書いておきたかった。義兄と私のトンチンカンな「姉ちゃん」がいかにか、ガンと向き合ったかを。たぶん、この「芥川だより」を誰かに見せることは一生ないだろうが（とくに、わたしの姉ちゃんには）書いておかなければならないという気がしていた。だが、義兄は死の淵から甦った。抗ガン剤でつるつぱげとなった頭に黒々とした髪をやし（白髪が一本もない）、肌もつやつやスベスベで、中年のおっさんとは思えないほどの甦りぶりなのだ。

わかったとき、「なるべく症例数の多い大病院」で治療をしようとし、手術・抗ガン剤・放射線治療の三本柱（義兄の場合は手術が不可能だったので、二本柱だが）で根治を目指そうとした。ウチの姉はこれに真っ向から反対。「ガンはそんなんでは治らんねん」と食餌療法をはじめとする民間医療と、なぜか最先端医療に執着した。正直にいうと、私も実は「姉派」だ。妹だから似た気質を持っているのかもしれないが、私自身、風邪をひいても、なるべくクスリは飲まずに（当然、医者にもかからず）、自然治癒力にゆだねるタイプ。だが、それはあくまで風邪っぴきの場合だ。もし、自分がガンだとわかったとき、のんびりと「自然治癒力にゆだねちゃいます」と言えるかという、絶対、言えない。信頼できると自分が思った医者が「手術しましょう」と言えば即、「お願いします」と言うだろう。だから、姉みたいに「抗ガン剤なんかやめとき。放射線なんかアカンで」と一方的に忌み嫌う勇氣？は私にはなかった。「それをしないで死んだら、どうするん？」と思っていた。もちろん、姉にもそう言った。姉は「ふん！」という態度で、「アンタは抗ガン剤の怖さを知らんねん。友達の人さんのやつちゃんはそれでポロポロになりはったんや」

いかにも、症例数が少ない。「やつちゃん」一人。
だが、ガンという病気は、夫婦に平等にチャンスをくれた。去年の秋の入院から今年1月の退院、それに続く通院による抗ガン剤治療が3月末ごろまであって、その間、義兄は成人病センターで自分の希望する（多分）治療を受けた。
姉は、義兄の入院中から、セッセと食餌療法の食べ物や飲み物を運んだ。ニンジンジュースだ、ソバだ、ヨーグルトだ、しょうが紅茶だ……と。そして、1月に退院すると、先端医療の施設に電話をかけた。受け入れてくれたところへ、義兄を引っ張っていった。この夏休み、久々に出会った義兄に、どれが効いたと思うかと尋ねると、義兄はさほど考えずに「放射線。抗ガン剤はあんまり効いてないような気がするんだ」。

それを聞いた姉は、ムカツとした口調で「だから、やめときって言うたやんか！ アンタ、抗ガン剤で、血管ポロポロにされてんで」。我が姉ながら、こういう態度の姉を見ると思うのだ。「この姉ちゃんのせいで、義兄は病気になるたのではないか」。思わず、口に出して言ってしまった。「（義兄のガンは）姉ちゃんのせいちゃうん？」。

こんなヒドイことを妹に言われて、一瞬でもたじろぐか思ったのだが、姉はすかさず、「だから、私がニンジンジュースで治したってるやんか！」と言い返してきた。え？ そういうことなん？ 前号でも書いたが、休職中の義兄の仕事は「ニンジンジュースを飲むこと」（と姉は思っている）。姉は朝・昼・晩とジュースを回しニンジンジュースをつくる。大量に。有機栽培のニンジンほかに、国産のレモンとリンゴを入れる。これらを手に入れることが、いまの姉のミッションだ。そして、ロイヤルゼリー、ハトムギ酵素、有機青汁、ブラックジンジャー等々の健康食品を、いかに苦勞して義兄に飲ませているかを語りながら、姉は「いいプロボリスを手に入れたいねんけど」。義兄のガンは治るかもしれないが、姉一家の家計が破綻するのではないかと心配な今日この頃だ。（AO）



上原むつえ

十七年もの長い時間と大変な資金を注ぎ込んで南国市の寺は立派によみがえったが、安閑とした時間は少しもなく、次々に災難とも言える事件に巻き込まれた。

ある日、突然に県警から呼び出しを受け逮捕されたのである。容疑は東京で起きた三億円強奪である。私はあの三億円事件の犯人に間違えられたのであった。寺の修繕費用に多額の金を用意する私にかけられた嫌疑である。逮捕され、取調室に連れ込まれ検事から強引な聴取を受けたが、私は何が何やら分からず取調室にいたが、檀家衆や周りの人は大騒ぎのようであった。

数時間後、大声でわめきながら男が入ってきて警察官に「この人は、大事な客人だ。何んと失礼なことをするんだ」しかりつけて連れて帰ってくれた。この人は、檀家の一人で私の知り合いの娘の親爺さんであった。警官達もあまりの迫力に負けたのか、釈放してくれた。

次に起こった事件は、寺の金が二十万円盗難にあったことである。この件で檀家の人々は、私が金を横領したのではないかと言ひ出した。

檀家衆の数人が来て、「あなたが、横領した金を返さない」と半ば脅し調子で、私に封筒を差し出した。私は、濡れ衣を着せられた冤罪を事実のように認めたと書面を読んで、あきれ返った。

事件について問答を繰り返すのは、僧籍にあるものとしてよくないので、時間をかけて檀家衆の疑いを解こうと思つていたが、いま眼前の檀家衆に私は言い放った。

「あなた方の言い分を静岡の弟に言つたら、弟はきつと裁判を起こすでしょう。そうすれば、私があなた方の強い希望で寺を修復するために実家から出させた莫大な費用をあなた方に請求するかもしれませんよ」

そう言うと、蜘蛛の子を散らすように檀家衆はいなくなつた。

これらの事件で、私は考えた。もうこの南国市での私の役は終わつたのだ。しかし、このまま高知を離れると檀家衆が私に抱いている疑いを残したままになる。私の心の始末がつかない。こんな思いを檀家の一人に話して「出来れば、お経を唱えられる家を高知で探してほしい」とお願いした

そんな思いをもって、高知から静岡の実家へ帰つた。実家では精神的な疲れが一週間飲み食い出来ず寝てばかりいた。一週間した後、高知から知らせが来た。頼んでおいた内山さんから、

家を用意したという。

その家は、養蚕に使つていた七十畳が二間ある大きな建物であった。使用されずにあつたのを、内山さんは高知駅の近くの山田町に移築してくれた。

私は、早速高知へ帰り、その家に入った。その家は非常に広く霞んで見えない位であつた。朝から晩まで毎日、三年間経文を唱え続けた。すると「変わった尼僧が毎日読経しとる」と噂になり、いろいろな人が訪ねて来るようになった。その中に南国市の檀家衆もいた。

こうして、私は人々の心にあつた自分に向けられた不信の念を少しづつ解きほぐし、仏に対する信仰を取り戻すように精進した。

後年、二十万円盗難事件は寺の近所の少年が盗みに入つたことが分かり解決したのであつたが、少年や檀家の人に対して恨みや憤りは感じなかつた。むしろ、そんなことがあつたお陰で、私は行に励む事が出来たし、知らなかつた事を経験できたのだから感謝しなければならぬと思うのである。

高知の読経三昧の日々で三年が経つた夜、不思議な夢を見た。「釈迦が池、吹田……といった地名が夢に出てきたのである。「これは、大阪の地名ではないだろうか？」ひよつとしたら、仏のお告げではないだろうか。私は、大阪へ出かけて調べる事にした。

異聞・幻のストラディヴァリウス①

開けはなたれた窓の外から、湿気を含んだ緩やかな風が、ロマ（ジプシーとも呼ばれる流浪の民）たちの歌声や喚声をはこんでくる。陽は傾いて部屋の中はひんやりして、心地よい。

広い部屋の床には、女性が身につけていたコットやコルセット、刺繍や寶石で装飾されたシュルコ、肌着などが無造作に脱ぎ散らかされている。

四人が横になれるほどの真四角の大きなベットには、一糸まとわぬ女性がうつぶせで寝息を立てている。メッテルニヒ侯爵夫人ソーニャー——。

ソーニャの横に仰向けで寝ている男は、定まらない視線を中空に浮かべ、広場から聞こえてくるロマたちのテンポの激しい歌声に耳を傾けている。ここウィーンでこの男を知らない人はいない。ヴァイオリニスト、ニコロ・パガニーニ——。

前年ウィーンを訪れ、春から夏にかけて十回の演奏会を開いたことにより、悪魔的といわれるその超絶技巧がつくりだす音楽はウィーンにとどまらず、オーストリア中に知れわたって、パガニーニ・フリーバーが起ころ。その後しばらくウィーンに滞在し、おもにサロンを中心に演奏活動をする事になった。へ

この日は、ソーニャ侯爵夫人の主催するサロンで、歌劇のアリアとかポロネーズ、マズルカといった小品を演奏し、聴衆を魅了した。そのしなやかな細い指から、真珠がこぼれ落ちるよう流れてる美しい旋律に、貴婦人たちは胸に手を当て、陶醉する。彼女たちの我を忘れて聞きほれている姿は、恍惚そのものである。

パガニーニは演奏を終えると、経営者であるソーニャに誘われるがまま二階の部屋へ移り、彼女と烈しく交わるのである。このような性の戯れはパガニーニにとって珍しいことではない。聴衆の一人に誘われることもあれば、パガニーニから誘うこともある。関係した女性は数限りない。女を食べてしまいたいと思うことがある。パガニーニにとって性欲は食欲と同じなのだ。天才的な技巧でヴァイオリンを奏できるように、女性の肉体をあつかう。女に歓喜の声をあげさせるツボ、指さばきを心得ているのだ。

パガニーニはいま四十七だが、肉体的な衰えは感じない。ヴァイオリンの技巧はさらに円熟味を増している。女もヴァイオリンも、数年は現役として奏でることができると信じている。

パガニーニは四十のとき結婚し子どもをもうけたが、五年で別れた。息子は四歳、彼が育てている。やんちゃ盛

りの、この腕白息子は、いま滞在先のオデオン・ハウスで父の帰りを待っているはずだ。

夕日に街並みが染まりはじめた。ソーニャは髪を乱したままうつぶせに寝ている。パガニーニは彼女の白くふくよかな尻を、たなごころに包むように二、三度揉んでから、腰に手をあて、仰向けに返した。ソーニャはトロンとした薄目を開けている。

彼女の唇を指でなぞってから、みずからの唇をやさしく重ね、舌を滑り込ませた。彼女は応えるように彼の舌を包むように吸う。

彼は彼女の首筋から脇の下、乳首、臍へと、唇と舌をはわせていく。彼女の感ずるツボの在りかを探るように、ゆつくりと……ツボには念入りに刺激し、さらに太ももから足先へと舌がはつていく。

右手を、彼女を抱くように背中に回し、たなごころと指先で背中をさすりながら、左手の指を彼女の股にあてる。すっきり潤んでいる。抵抗なく二本の指が奥へ奥へ忍び込んでいく。

パガニーニの細く長い二本の指が、ソーニャの奥処で動き出す。弦をはじくようなピチカート、激しいヴィブラート、絶妙のトリル、ヴァイオリンの技巧を駆使して、ソーニャをオルガスムスへと導いていく。(猿)

「敗戦記念日」

八月十五日の終戦記念日に、まず思う。

《なんと馬鹿な戦争をしたのだ》

広島原爆で二十六万人、長崎原爆で十五万人、沖縄戦で十二万人、東京空襲で十万人。多くの国民が死んだ。非戦闘員を無差別に殺した点で、米国の仕業はナチスによる大虐殺と変わらない。

もう一つ。

《終戦記念日は敗戦記念日にすべきだ》

敗戦だと敗因を考える。日本の敗因は明確だ。為政者が勝ち目が無いのに戦争を始めたからだ。何故か。当時の為政者が軍人だったからだ。軍人は戦争が仕事であり、戦争が好きなのだ。何故、軍人が為政者になったのか。天皇制だったからだ。天皇は「君臨すれど統治せず」を宗とした。その隙に軍人がはびこった。軍人は統帥権を乱用して民主主義をないがしろにした。

明治維新以降、日本は強兵に努め軍国化に邁進した。その結果、軍人が天下を取った。軍人の天下になれば戦争が起こるのは当たり前だ。国民も軍人の暴走を許した。日清・日露の両戦争の勝利に有頂天になった。

『大国なにするものぞ』との驕りがあった。

私は戦争のお蔭で生まれた。母の先夫はベトナムのトンキン湾で戦死した。その弟が帰国して母と結婚した。そして生まれたのが私だ。戦争がなければ私は存在しない。それでも戦争は嫌だ。人間が殺し合う位なら、生まれて来ない方が良い、と思う。(龍)

俳句

直子

- 夏潮の満ちて国後指呼の間に
- 玫瑰や鈍色に風ぐオホーツク
- 灯台に人住みし跡独活の花
—— 知床を旅して
- 花付きし胡瓜漬け込む朝厨
- 星流れ蛍と紛ふ峽の闇
- 酷暑の日暮れて中天月赤し



死から生への問い 人生と何か

祖蔵 哲

原因が理不尽なものの中で最大のものは人の死です。かけがえのない存在が消えていくことには説明されてもなかなか納得できるものではありません。体は失われても魂というものは残ると考えるのはある意味自然なことかもしれません。なぜなら生きていくとき、その人がそばにいるのではなく遠くに離れていてもその人のことを感じることができからです。その人が死んでいなくなっても何かが残るそれが魂というものになるといえる方は時代を越え非常に多い受けとりようです。

しかしこの魂の存在は良いことばかりを起すとは限りません。それは死者がこの世に何らかの恨みをもっていた場合です。これは「祟り」という形でこの世に不利益をもたらします。死者の恨みは怨霊となって病氣や災いをもたらすという現われは歴史に多く記録されています。わが京都の平安遷都も、その前の長岡京の遷都での政治的謀反人の処刑による怨霊を鎮めるために急遽行われたものです。

このように死者の魂はこの世にずっとさまようのではなくどこかに安ら

かに住むというところを作らねばならない必要にせまられてきました。このようななかで仏教やキリスト教といった人工の宗教が誕生したわけです。魂があるかどうかとかがそれがどこへいくのかといったことも多分に宗教的、歴史的事情が関係しているわけです。

だからといって私は魂が一切存在していない、人は死んだら無になるとは思いません。なぜなら魂はないということとは証明できないからです。故人の残したものをみて生前の事を思い出す。季節が変わる場所が変わると故人といった瞬間を思い出し同じ温度や雰囲気を感じるでしょう。これが魂の存在でありそれは私たちのところに存在すると思えます。魂は物であると考えるとそれはいずれ消えてなくなるということになりません。魂というものは記憶でありそれは様々な形無き形として生き続けるのでしよう。

3. 死から人生の意味へ

母の死を契機にして「死の定義から意味」を考えてみることにしました。「死の定義」、それ自身は時代とともに拡大されまたそれを受け止める側も一般の死、身近な人の死、自分自身の死といったそれぞれの立脚点で意味合いが変化していくことがわかりました。しかし現代は「死の意味」

を問うことよりも「生きる意味」を知るといふ問いに変わってきています。「武士道と云ふは死ぬ事と見付けたり」とか「桜の花の散るごとく」といった死のあり方を問うことよりも「生き方」を重視するという方向へ転換しように思われます。延命問題も尊厳という生き方の問題にかかわることかもしれません。

死よりも生が問題になってきているからといって現実の社会からは生きていくという実感はどんどん遠くなっています。都市の便利な生活は見方をかえると死を隠蔽して出来ている社会です。スーパーで売っているパックされた肉や魚にはその出現過程はわかりません。あらゆるものが源流から切り離され部分しか目に触れることはできなくなりました。核社会がすすんで家族のなから死者がでなくなりまして。死を切り離れた社会は生の実感も薄れてきています。また高度な情報化社会ではすべてが映像化され仮想的なイメージのなかの世界でなりたっています。この様な現実感が欠如した社会にあつては何か足りないとはいった漠然とした空虚感をもって生きている人が多いのもうなずけること。いわば全員が軽度の鬱状態であるともいえます。耐えること、我慢することに意味を見出さない社会はそれらをしても得

ることが少ないという高度に成熟しすぎた社会の弊害でしょうか。大多数の人はこの充足感のない社会で悶々と生きていく一方、生きている意味なんてもともとない、それゆえ考えたことでもないといった人もいます。

しかしこの何も考えてないというのもひとつの意味ある生き方ではないだろうか。試しに身近な人に生きる意味、何のために生きているのかを聞いてみるといい。多分そんなことを考えている暇はないとか、考えても無駄とわかっているから考えないという答えが返ってくるだろう。この何も考えないということはもともと何かを期待しないという態度である。その代わり自分からは何の規制も制約も設けないということである。人生に意味があると思うことはそれを探し求めるためにルールを作ることもありません。しかし求めなければこれらもいらない。

この一見投げやりな態度はそう非難されるべきではないかもしれない。こう考える方が楽だし力が入らずに自然にありのままに生きられる。けれどもこの生き方を徹底できる人は逆に非常に稀で中途半端で終わっている。人生の意味なんて考えたこともないという人に限って逆境に直面すると折れやすい。極端になり全否定、自己否定に陥ってしまうパターンが非常に多い。

「我々の世代がなすべきこと」

明石 幸次郎

政権与党の民主党が党首選の主導権争いで、ゴタゴタしているからか、一向に景気回復のこれといった政策が採られず、円高、株安、消費低迷が続いており、連日の猛暑と重なり国民の不満、イライラは募る一方であります。

この景気の悪さを反映して、来春4年制大学卒業予定者の就職予定率は過去最低水準の約60%に留まり、9万人位の大学生が進学も就職も出来ずに社会にほうり出され、高卒者も合わせれば、15万人にもなると報道されて、大きな社会問題になっています。

私事になりますが、我が愚も来春卒業予定者で、遅まきながら今年初めから就職活動をやり始め、かなり苦労しましたが、何とか夏休み前に内定通知を貰ったようで、脛が細くなる年金生活が始まる親として、これで脛をかじられずに済むのかと思うと、ホッとしています。しかし、愚息と同じ学校の友人の何人かはまだ、就職先が決まらず、結局、今年は諦めて、来年留年をして再度就職活動をするとのこと、これは、本人が一番つらい思いをしています。同じ世代の親のことを思えば、私も複雑な気持ちになります。

愚息曰く、自分たちの世代は物心がつき始めた頃に、バブル崩壊が起こり、それからずつと景気が悪い悪いと言われ続け、決定的なインパクトがリーマンショックで景気が最悪の状況になってしまった。自分たちが成人になるまで、社会全体にずつと閉塞感が漂っていて、明るい話題は余り無く、何となく、この社会は生きづらく、気持ちも塞がっていたと言う事です。こんな日本

の社会から早く海外に出て行きたい。それは、自分だけでなく、同世代の仲間の共通な思いであるらしく、学校ではゆとり教育と言われ子供の自主性に任せることを強調するだけで、厳しいことは余り言われず、何となく学校がけだるく、その調子で中学生まで

楽をしていたら、高校と大学に入る時にその反動でエライ苦労した。今度は、就職する時に経済がグローバル化したので、企業もグローバル化しないと生き残れず、当然として、グローバル化に適応出来る人材を優先して採ると言われ、グローバル化した教育とは程遠い、個性を軽視した教育しか受けていない自分たちは、企業社会の厳しい現実と不条理さを一度に嫌というほど経験する、本当にかわいそうな世代だと憤慨しています。

翻って、我々60歳前後の世代は、所得倍増から高度成長期に物心がつき

それから学生時代を過ごし、その間、時代的には好景気がずつと続き、明日が今日よりも豊かになることが実感出来た時代でした。しかし、その反面、公害問題や貧富の格差の社会問題、東西冷戦の政治的な緊張、ベトナム戦争、中国の文革などに影響された反体制的の学生運動が激しくなったりしました。その影響で大学が

封鎖されたりしてまともに勉強せず、その反面、生きる価値観が回りから問われる落ち着かない、不安定な気持ちで学生生活を送りました。そんな気持ちでも、今思えば、愚息の世代が感じるような社会の重苦しい閉塞感を感じませんでした。まあ

社会に出て、どこかの会社に入りさえすれば、経済的に自立出来て、学校でまともな勉強もしていなく、何も誇れる能力が無くて、そこで何とか人並みに努力さえすれば、サラリーマンは気楽な稼業であるの、何とかなるという気楽さは、共通して我々の世代は持っていました。社会、会社などの組織に対する信頼感が今よりは、はるかにあったような気がします。

それでは、多少なりとも時代の影響で好い思いもした我々の世代は息子、娘達の世代に対し、何が出来るのか？それは、我々以上の世代が

一部の才能、能力の高い人を除き、ぼちぼち引退をして限られた椅子をこれらの世代に譲ることしかありません。どこやらの、府民共済の理事長が75歳にもなり、退職だと称し、2億数千万円もの退職金とそれまで、350万円もの月給をせしめていたとか、政府、地方自治体の外郭団体の

天下りの役人が、(大阪市も同様)一千万以上の年収と数年して退職金を数千万円貰い、何箇所か移るたびに同様な待遇を受け70歳近くまで当然の権利として役得ポストに居座り続けられる役人天国。就職先が見つからない息子達の世代からすれば、何と恥ずべきことをしていると本人達がもつと自覚して、これは税金泥棒だと感じて辞職してほしいものです。

これらの制度を放置して、政府のやることは、大学のキャリア教育の助成とか、ジョブカフェの相談員の増員、新卒者の就業援助資金増額など場当たり的なことをやっているが、民主党は政権をとる前に公約した、役所全体の無駄(人、組織も含め)をもつと省けば財源が出て来て、新しい雇用の機会も作れるといったことを徹底して実行して欲しいものです。

日本の若者が就職も出来ず、社会的な役割も与えられず、やり場の無い気持ちで悶々として、もえらな心ついた頃から今も尚そんな気分にいる社会は決して健全な良い社会とは言えません。若者が明日に少しでも希望が持てる社会を築きあげることに、民主党も政治的エネルギーをもつと使って欲しいものです。それが、我々と同世代の営さんの最大の政治家としての仕事ではないでしょうか。

受診機

「ジーと手許の受診機が点滅している。」

「診察室へお入り下さい」

九時三十分の予約だけれど、と思

いながら入る。先生曰く、

「どうしたんですか」と。
新快速、バスと都合よく一番に乗車出来て、こんなに早く来てしまつて、

「三十分待つ覚悟でした」

朝から縁起がいいぞ。開院と同時に、名前を呼んでくれるなんて。この調子でゆけといそいそと受付へ。

「診察券を出して下さい」

ハイハイ、保険証にはさまって出て来そうにない。お嬢さん、

「そのまま見せてもらいたいんですよ」

トントンと機械をたたき、坐る間もなくジーと鳴る。時間が早いと、なーんと、スムーズに事が運ぶのだなあ。

病院外の薬局で、階段をコツコツいつまでこの事を繰り返すのか。エレベーターぐらい付けたらいいのに、と思っても、借家でどうにもならなかったらしい。
十年は雨が降っても寒くても、あの階段をあがったわ。手すりを持つ

て。年と共に心の重荷になりかけた時に、

「新館一階になりました」

という貼り紙。ヤレヤレ、受付から薬剤師さんから、顔ぶれが変わった。

「あづつてるんですよ、あづり餅ですよ」

と方言丸出して薬を受け取ったら、

大村崑さんそっくりの叔父さん・

「へエ、なんですって」

メガネを鼻の上までずらして、目玉までクリクリ。崑さんと話してるような気分。

「私が、言った事わかりませんか」

へエ、その言葉がねえ、と言う。

「一ヶ月に一回来て、十五日分薬頂きます」

五ミリ位の薬を半分にして飲む。

とても無理。粉末になって飛び散り、かき集めて飲んだり、まあ、一個まるきり飲む事になりますわ。

薬が切れても一月してから来院。そういう事です。

「あづつてる」

という事は

「薬物を割る機械があるんですよ。」

割って差し上げましょうか」

「そんな事、初めて聞きました」

「十分位お待ち下さい」

「飲みやすくして下さいさるのだから、十分でも二十分でも待ちます」

へらず口をたたきながら待つ。

「出来ましたよ。吉田さん。困っていられたら、もっと早くに言っておきま

た。全部割って湿気がきたらダメですのよ。」

「いらつしやい」

「お大事に」

これが薬の受け渡し時の切り口上だった。最近いやに言葉がやさしくなり、詳しい明細書つき。

ちよつとした一言、ちよつとした優しい態度が心を解きほぐしてくれる。今である。



編集後記

長野市にある山猿宅に友人達と出かけた。戸隠高原は標高が高く、二十五℃と涼しい。名物のそばも美味しかった。奥社に続く参道の杉並木は印象深い。樹齢千年を超える大木の杉が両側にそびえ立っている。千八百部も続く参道も長くて歩き応えがある。舗装されていないゆるい坂道を、参拝者が続々と登ってくる。人気のある名所なのである。

奥社の後ろにそびえる岩山が戸隠山である。私は遠慮したが、三人の友人は九時間かけて縦走した。下りて来た彼らは、稜線で熱中症に悩まされ、絶壁の険路で滑落の恐怖におびえ続けたという。「あんな怖い山は初めてや。二度と行きたくない」と憔悴しきった表情で言った。

私は行かなくてよかった。登っていたらどうなっていたらだろか。思うだけでもコワイ。戸隠山は見上げる山だ。

『人気のデザイン』②

チャイニーズのブラウス

*

定番のブラウス
ほっそり見えるのが
人気のデザイン



着物から服を仕立てます

梵-ぼん-